

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 21 日現在

機関番号：33917

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23401047

研究課題名(和文) 民族連邦制国家エチオピアにおける宗教の共同体のもつ公共性に関する人類学的研究

研究課題名(英文) Anthropological Study on Public Spheres of Religious Communities in Ethiopia

研究代表者

石原 美奈子 (Ishihara, Minako)

南山大学・人文学部・准教授

研究者番号：20329741

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 10,900,000円、(間接経費) 3,270,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、民族連邦制国家エチオピアにおいて、広義の宗教(設立宗教のみならず呪術など民間信仰含む)がさまざまな次元でいかに人々の私的・公的領域で役割を演じ、現政権が分割統治しようとしている民族の境界をこえて人々のネットワーク作りの契機となっているかについて、とくにエチオピア南部の諸社会での文化人類学的調査を通じて明らかにするものであった。同国の主要二大宗教(キリスト教とイスラーム)は、グローバル化の影響で新たな流派が導入され、新たな宗教共同体を形成するだけでなくその内外で対立をも生んでいる。土着の民間信仰や精霊崇拜も宗教・民族の境界を越えて拡大している。

研究成果の概要(英文)：This study focuses on how religion and religious activities are becoming central in the private and public lives of Ethiopians, and how they provide alternative options for the Ethiopians to form personal networks outside their local, ethnic or regional communities, under a federal regime which attempts to maintain its control on the society by a divide-and-rule system. The project consists of anthropologists conducting research mainly in southern Ethiopia, where "pagans (non-Christian, non-Muslim)" predominate. On the one hand, under the current globalization, new trends are being introduced in Christianity and Islam, instigating conflict, and on the other hand, indigenous folk religion and veneration of spiritual beings are both reviving and proliferating.

研究分野：人文学C

科研費の分科・細目：文化人類学・民俗学

キーワード：エチオピア 民族連邦制 宗教 キリスト教 イスラーム 呪術 精霊崇拜 公共空間

1. 研究開始当初の背景

- (1) これまでアフリカの宗教に関する文化人類学的研究は、呪術や祖先崇拜をはじめとする土着の民間信仰とキリスト教やイスラームなどの設立宗教を別個に論じる傾向があった。そうした傾向は、民族を単位とした調査研究が主流をなしていたことと、設立宗教の受容・導入を世界市場への参入や近代化と結びつけて論じることが多かったことによる。
- (2) 1990年代以降アフリカにおいては、国家の脆弱化と新自由主義化した資本主義と関連して、呪術・妖術など土着の民間信仰として衰退すると期待されていた広義の宗教現象が現代社会特有の仕方では復興したり、あるいは設立宗教が地域の特色に応じて土着化したり、といった仕方では広義の宗教現象は目に見える形で公共空間を満たしている。
- (3) 本研究は、キリスト教・イスラーム・ユダヤ教などセム系宗教が他のアフリカ諸国に比べて受け入れられた時期が早く、設立宗教が国家形成と密接な関わりをもっていたエチオピアにおいて、1991年政変以降に成立した現EPRDF(エチオピア人民革命民主戦線)政権のもとで広義の宗教が目に見えて盛んになってきている状況を実証的に分析することを旨とした。

2. 研究の目的

- (1) 現在エチオピアでは、1991年に軍部が主導する労働党一党独裁体制(デルグ政権)が倒れ、複数の民族政党を傘下に置くエチオピア人民革命民主戦線(EPRDF)を与党とする政権が成立した。EPRDF政権は民族居住地域を基準にした行政区分を採用し、民族自治を認める、いわゆる民族連邦制を導入した。これにより、エチオピアを構成する80の民族に政治参加の道が開かれた。だが一方、民族連邦制は、多民族国家の抱える問題をかえって複雑にした。とくに少数民族が数多く存在する南部諸民族州では、民族連邦制導入により、異民族間の武力衝突がおこるなど新たな問題が発生した。こうした状況の下で、昨今、民族の境界を超えて新たな共同体を形成する契機となっているのが宗教である。
- (2) 本研究は、エチオピア南部の諸社会において継続的に文化人類学的調査を行ってきた研究者が、それぞれの対象社会の広義の宗教に注目して、その今日的な展開について調査を実施し、広義の宗教がもつ役割や変遷について理解を深めることを目的とする。

- (3) 民族や地域を越えたつながりの契機を与え、医療や教育など社会的な機能をもつ宗教的組織の活動や、現代社会が抱える矛盾や災難を解釈する枠組みを提供するものとして宗教に注目することで、「固い宗教観(政治化された宗教)」や、「閉ざされた宗教観(特定民族の世界観と結び付けられた宗教)」を相対化することが本研究の目的である。

3. 研究の方法

- (1) 文化人類学の調査方法は、現地に赴いて現地の人々と彼らの言語で語り合いながら理解を深めるところに特徴がある。代表者・分担者・協力者は、それぞれ調査研究の対象としてきた社会で10~20年以上の調査経験があり、対象社会の言葉や文化に精通しており、独自の人脈や情報源をもっている。そしてそこから得られた情報、もしくは計測や観察により得られたデータを一次資料として利用してきた。
- (2) 本研究は、個々のメンバーが利用してきた調査方法に重きをおいた。メンバーは、それぞれの事情に応じて調査時期と期間を決定し、アジスアベバ大学エチオピア研究所と緊密に連絡を取りながら、調査を実施した。また調査実施の際には、対象社会を管轄する行政機関で調査許可をもらったうえで調査地に入った。

4. 研究成果

- (1) まずキリスト教のうちエチオピア正教会は、アビシニア王国の根幹をなし1974年まで続いた帝政期下では国家と密接な関わりをもっていたが、デルグ政権下で国家とのつながりが断絶した。その後、現政権を主導するティグライ人の大半がエチオピア正教会の信者であることもあり、エチオピア正教会の活動は、その階層的で秘儀的な性格にもかかわらず、活発になっている。教会は全国各地で建設が進んでおり、祈禱や礼拝にはかつない規模で信者が通っている。各地にある巡礼地も道路が整備されたこともあって、大勢の巡礼者を集めており、そこで集まる誓願の品々は教会の重要な収入源となっている。
- (2) キリスト教のうち海外のプロテスタント系のミッションがエチオピアで設立した教会の活動に関しては、デルグ政権期に休眠状態であったが、現政権下で復活し、西洋流の医療・教育活動の提供を通して、とくにキリスト教徒でもムスリムでもない「ペイガン」の間で信者層を広げている。これらミッションは、土着の精霊崇拜などを悪魔

崇拜として非難する。エチオピア南西部の少数民族の社会の中でも周縁的な位置づけにある集団などがプロテスタント派キリスト教に改宗している。たとえば研究協力者吉田早悠里は、カファ社会においてカファの大半がエチオピア正教徒であるのに対して被差別集団マンジョは現政権下でその多くがプロテスタント派キリスト教に改宗していることを明らかにした。また分担者増田研はバンナ社会での調査を通して、バンナ社会でプロテスタント派キリスト教に改宗する者（若者中心）が従来のバンナの祖霊信仰はじめ伝統や文化を保持する者たち（長老中心）を非難しながらも、その立場を認め共存している現状を明らかにした。

- (3) エチオピア南部にいる数多くの「ペイガン」の少数民族の中で、土着の民間信仰を頑強に保守している民族もいる。たとえば分担者田川玄が研究対象とする牧畜民ボラナ・オロモは、オロモの分派の大半がキリスト教やイスラームを受容し、伝統的なワカ（天空の神）信仰やアヤナ（精霊）崇拜、およびガダ体系（年齢階梯）を放棄しているなかで、それらを頑に保持し続けてきた民族分派である。現政権が穏健な民族主義を支持し、オロモ全体が伝統的なオロモ文化（ガダ体系・ワカ信仰）を見直す傾向があるなかで、ボラナは理想的なオロモ社会として注目されており、煩雑な儀礼を粛々と伝授している。
- (4) 同じ「ペイガン」の少数民族でも、設立宗教の導入とは無関係の仕方で宗教変容が起きている民族もある。たとえば1960年代に近隣民族（ボラナ）からアヤナ崇拜を受け入れたホール社会である。分担者宮脇幸生は、ホール社会の（女性中心の）一部の人々の間で精霊憑依の儀礼（アヤナ・カルト）が蔓延している事実を明らかにし、そこで使われているモチーフや道具が20世紀にホール社会を支配・搾取する集団として出現した（エチオピア帝国の）支配者民族アムハラを想起させるものであるが、アヤナ・カルトはホール社会がそれまで保持していた宗教・政治・社会概念を組み込みながら発展・維持されていることを明らかにした。
- (5) 精霊崇拜や呪術・妖術は、エチオピアの諸民族に深く根付いている。それはキリスト教やイスラームを受け入れた人々にとっても同様である。分担者藤本武は、南西部の少数民族の一つマロでの調査を通じて、呪術や妖術が依然社会生活のなかで大きな役割を演

じている状況について明らかにした。また研究協力者の松波康男は、ショワ・オロモの人々が（キリスト教徒であるにもかかわらず）病気や家族問題などの悩みの相談に霊媒師を頻りに訪れると同時に、さまざまな聖地に参詣に訪れている状況を明らかにした。同じくショワ・オロモの伝統の（創造的）復活について調査を実施した協力者の垣見窓佳は、帝政期・デルグ政権下に衰退してしまったオロモの文化（ガダ・イレッチャ儀礼など）を現政権下で復活させようという運動があることを明らかにした。

- (6) 最後にイスラームについて。ムスリムは、アビシニア王国時代から（16世紀に大規模な衝突が起きたことを例外として）キリスト教徒とは、その支配のもとに置かれながらも比較的平和的に共存してきた。帝政期、政治社会的に二次的な地位に甘んじながらも宗教信仰の自由を認められていた。宗教活動に対して総じて抑圧的であったデルグ政権が崩壊した後、メッカ巡礼はじめムスリム諸外国に出かけるムスリムが増え、ムスリム諸外国の（イスラーム復興主義的）思想が持ち込まれた。海外のムスリム組織の援助を受けて国内各地に新モスクが建設され、従来のスーフィズムや聖者崇拜に対して批判的立場をとる人々が増えた。一方で、従来のスーフィズムの活動や聖者廟参詣、隣人や友人同士で開く祈禱集会（ハドラ）はさかに行われるようになり、急進派のイスラーム復興主義者たちの標的になった。だが急進派イスラーム主義者たちが、キリスト教徒を襲撃するなどの事件が発生してから、政府が穏健なイスラームの立場（スーフィーヤ）を支持するようになり、対立構図が複雑になった。加えてエチオピア政府が、隣国ソマリア情勢の悪化により、ソマリアへの軍事介入を行うなど外交・軍事面でも「イスラーム復興主義」に対抗するようになり、国内のイスラーム復興主義関連施設や関係者に対する締め付けが厳しくなった。研究代表者石原美奈子は、こうしたエチオピアの現在のムスリムが置かれた状況について明らかにした。
- (7) (1)～(6)に関しては、石原美奈子編著『せめぎあう宗教と国家：エチオピア 神々の相克と共生』（風響社、2014年）にまとめた。

5. 主な発表論文等  
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 4 件)

石原美奈子、「コーヒーの意味と価値の変容 エチオピア南西部の事例」『人類学研究所研究論集』第 1 号、査読なし、2013、pp. 150-180。

藤本武、「From Festive to Exchange Labor: Changing Cooperative Labor among the Malo, Southwestern Ethiopia」, *Nilo-Ethiopian Studies*, No.18、査読あり、2013、pp.21-36。

吉田早悠里、「Struggle against Social Discrimination: Petitions by the Manjo in the Kafa and Sheka zones, Southwest Ethiopia」, *Nilo-Ethiopian Studies*, No.18、査読あり、2013、pp.1-19。

松波康男、「異質な参詣者と聖地の共同性：エチオピア・ボサト郡に見られる参詣の諸相」『年報人類学研究』、査読あり、第 3 号、2013、pp.74-96。

[学会発表](計 3 件)

吉田早悠里、「Claiming ethnic identity: A case study of the Manjo in the Kafa zone, Southwest Ethiopia」, The 18th International Conference of Ethiopian Studies、2012 年 10 月 31 日、Dire Dawa University (Ethiopia)。

吉田早悠里、「周縁化の人々から『差別』される人々へ 変化するエチオピア南西部カファ社会とマンジョ」日本アフリカ学会第 49 回学術大会、2012 年 5 月 27 日、国立民族学博物館。

石原美奈子、「聖者伝を読み解く：Sitti Momina の Manaqib を通して」、日本ナイル・エチオピア学会第 21 回学術大会、2012 年 4 月 22 日、京都大学。

[図書](計 4 件)

『せめぎあう宗教と国家：エチオピア神々の相克と共生』(石原美奈子編、藤本武、田川玄、宮脇幸生、吉田早悠里、増田研、松村圭一郎、松波康男)2014、風響社、436 頁。

吉田早悠里、『誰が差別をつくるのか』、2014、春風社、416 頁。

宮脇幸生、『よくわかるジェンダー・スタディズ 人文社会科学から自然科学まで』(木村涼子・伊田久美子・熊安貴美江編著)2013、ミネルヴァ書房(執筆担当部分：「世界観」pp.42-43、「女子割礼/女性性器切除」pp.44-45、「グローバル化と文化研究の新しい展開」pp.46-47)。

石原美奈子、Muslim Ethiopia: The Christian Legacy, Identity Politics, and

Islamic Reformism、(Patrick Desplat & Terje Østebø、ほか 8 名) 2013、Palgrave Macmillan (執筆担当部分：「The Formation of Trans-Religious Pilgrimage Centers in Southeast Ethiopia: Sitti Mumina and the Faraqasa Connection」、pp.91-114)

[産業財産権]

出願状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

[その他]  
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

石原美奈子 (ISHIHARA, Minako)  
南山大学・人文学部・准教授  
研究者番号：20329741

(2) 研究分担者

宮脇幸生 (MIYAWAKI, Yukio)  
大阪府立大学・人間社会学部・教授  
研究者番号：60174223

田川玄 (TAGAWA, Gen)  
広島市立大学・国際学部・准教授  
研究者番号：70364106

藤本武 (FUJIMOTO, Takeshi)  
富山大学・人文学部・准教授  
研究者番号：20351190

増田研 (MASUDA, Ken)  
長崎大学・大学院水産・環境科学総合研究科・准教授  
研究者番号：20311251

松村圭一郎 (MATSUMURA, Keiichiro)  
立教大学・社会学部・准教授

研究者番号：40402747

佐川 徹 (SAGAWA, Toru)  
京都大学・アジア・アフリカ地域研究  
研究科・助教  
研究者番号：70613579

(3)研究協力者

吉田早悠里 (YOSHIDA, Sayuri)  
日本学術振興会・特別研究員

松波康男 (MATSUNAMI, Yasuo)  
一橋大学大学院・博士後期課程